東京教区時報

第１１７（定期）教区会

2011年12月11日発行
日本聖公会東京教区
港区芝公園3―6―18
編集人　英　久子

WEB:http://www.nskk.org/tokyo/index.htm E-MAIL:comm.tko@nskk.org
Phone:03-3433-0987, Fax:03-3433-8678 Diocese Office

自分の命を救おうとするものはそれを失うが、わたしのために命を失う者はそれを得る
（マタイ福音書16章25節）

教区会開会に当たりまして一言申し述べさせていただきます。教区会信徒代議員、聖職議員におかれましては休日のところ、ご参集頂き、教区の働きについて話し合いをしていただけますことをまずもって感謝申し上げます。

２月に按手され、着座した直後の３月11日に東日本大震災が起こり、日本はもとより、日本聖公会全体に激震が走りました。その対応につきましては、先の教区会で支援募金の決議などをさせていただきました。しかし津波や地震だけではなく、その後起こっている原発事故などに関し、私たちはいろいろな気付きを与えられています。大地震での対応やその後の動きで、私たちは教会の在り方、宣教の方針について新しい視点を持って、考えていかなければならないことを思い知らされています。今教区会は、２０１２年度の予算審議、またそれの裏づけとなる教区費分担金の改訂ということが大きなテーマになっております。しかし２０１２年度をどうするかと言うことを議論するためには、明確な宣教の指針の提示が必要であり、先の教区会のおり以来、小職には東京教区の将来ビジョンについて大きな期待があることを実感しております。ただ主教としてこれがそうだというものを提示するためには、私は共に学び祈っていくことを重要なことと考えております。共に話し合いの中から作り上げていくものであると考えています。そのためこの教区会に先立って、教役者会が主催して11月の９日に懇談会、また12日には小職が呼びかけまして懇談会を催させて頂きました。多くの信徒、教役者にお集まりいただき、いろいろなご意見をお聞きする機会が与えられたことは本当に幸いなことでございます。今後も意見を共有することができればと考えております。

◇第１１７回（定期）教区会開会演説◇

東京教区主教　アンデレ　大畑　喜道

☆世界の聖公会や日本聖公会の宣教指針

将来のビジョンを考える上で、世界の聖公会が、どのようなビジョンを持っているかと言うことについて、宣教理解がどのようなものであるかということをまず持って確認しておくことは大変に重要なことであると考えております。ことに日本聖公会も積極的に参加している全聖公会中央協議会（ＡＣＣ）といいます、（Anglican Consultative Council）での関心事を、私たちも理解する必要があります。それは私たちの教区も世界の聖公会との一致と連帯の中にあることの証しともなります。１９８４年にナイジェリアで行われたＡＣＣ６では、宣教指針として四つのこと

を確認しております。

1、神の国の福音を宣言すること。

2、新たな信徒を教え、洗礼を授け、養うこと。

3、愛の奉仕によって人間の必要に応えること。

4、社会の不正義な構造の変革に参与すること。

続いて１９９０年のウエールズで行われたＡＣＣの第８回会議ではもう一つつけ加え決議しております。

5、被造物の完全さを守り地上の命を保持し新たにするために努力すること。

この決議はすでに20年を経過しておりますけれども、私たちが宣教を考えていく上で、非常に大切な指標であると認識しています。それを受ける形で、東京教区は当時の竹田主教の下で、１９９６年に東京教区の宣教方針の議決をいたしました。いと小さき者のために私たちは出かけていくことということが合言葉になりました。これは竹田主教様をついだ植田主教様にも引き継がれていたものであるという風に思っています。21世紀になって、管区では２００２年に、先のＡＣＣレポートと、その後行われた95年の宣教協議会の宣言を踏まえ、管区６委員会が、日本聖公会の宣教方針を策定しております。

1、小さくされている人々と共にキリストの福音を分かち合うこと。

2、福音を受け入れる人々に洗礼を授け、神の宣教を担う者として共に成長すること。

3、差別され、抑圧されている人々の具体的な必要に応えること。

4、不正な社会構造を変革し、正義と平和を実現すること。

5、被造物の保全に関心を向け、地球のあらゆる生命のために活動すること。

これは基本的には同じことを言っているわけですけれども、福音の宣言を行うということについては、たとえば独白的であってはいけないという思いから、それを分かち合うことが大切であるというように変えられております。どのように福音を分かち合っていけるか、いと小さき者と寄り添っていくことがなければできないことを私たちは痛感させられております。それから10年がたち、日本聖公会では来年度宣教協議会を開催することにしております。それに先立って、昨年２０１０年にはプレ宣教協議会が行われました。そこで話し合われたこと、現実の課題は10に纏められております。貧困、高齢化社会、正義と平和、社会的少数者、ストレス社会、青少年、子供達へのかかわり、宣教の担い手を育てる、教区間の協働、財政問題。この会議で行われた成果は非常に大切なものと考えております、ただその膨大な報告書を皆様方にお配りするわけにもいきませんでしたので抜粋版を教区の皆様方にお配りをいたしました。１５０周年の時に作った「裸足の宣教」ともどもじっくりとお読みいただいて意見の交換をしていくことができればという風に考えております。

☆東京教区の宣教指針策定のために

95年に行われた日本聖公会の宣教協議会については必ずしも、私たちが共有しきれていなかったのではないでしょうか。相互のやりとりを密にしていくことでより深められていくことだという風に思います。単なるお題目で終わってしまってはいけません。そこで、東京教区としても２０１２年の日本聖公会の宣教協議会を前にして、自分たちが３・11の大震災を踏まえて、もう一度宣教方針を見直し、自分達で作り直してみようということを計画しております。基本的な方向性は、先のＡＣＣの５指標にあるという風に思いますけれども、下から積み上げていくことが非常に大切なことと考えるからです。東京教区の宣教協議会の開催を今般の予算に計上させていただいております。そのために現在準備委員会が立ち上げられて、私たちの大切にしてきたこと、これから大切にしていくことを再確認する作業を行いました。夏前に各教会にアンケートが配られ、それが殆ど戻ってきております。そのアン

ケート結果を集約してみる作業は、まだ完成しておりませんけれども、今日は、各教会から戻ってきた生のアンケートを掲示させていただいております。ともすれば私たちはあれもできない、これもできない。これもしてこなかった、あれもしてこなかったと互いに批判的になってしまいます。各教会が模索していること、やっていることをみると、非常に参考になることが多く含まれております。今教区会の休み時間にそれを皆様で見ていただければという風に思います。そして来年度に行おうとする東京教区の宣教協議会で、各教会が互いに祝福しあい。教会の理解、福音の理解の再確認をしてゆくための資料としていきたいと願っております。勿論、東京教区の全員が参加するわけにはいきません。しかし是非多くの方々の関心と参加を期待したいとこの様に思います。宣教について、教区の方向性についてご一緒に話し合っていきたいと思います。

☆東京教区の現状と解決に向けて

東京教区は分担金の負担増に対し各教会が真剣に考えていてくださっているように、前の何回かの教区会以来の大きな課題であるという風にも思います。今教区会では2年間の委員会の検討を踏まえて、分担金制度の改正が議論されることになっています。大変に苦労された改革案が上程されていると思います。しかし制度だけが変われば上手くいくということではありません。そこに信仰的な一致がなければ、不公平感は決して払拭されることはないでしょう。血の通い合った支えあいの精神がなければ。自分の教会が負担が減ったから良しとするのではいけないと思います。負担増になってしまう教会に対し、一緒に戦う意識をもつことは大変重要なことだと考えます。制度が機能していくために重要な視点であろうかと思います。人数が増えれば財政問題も解決するのではありません。分担金は決して税金ではありません。ともすると、教会に集う人がお金に見えていくのは私は不信仰な姿、世俗的なものの考え方であるという風に思います。教会が財政的に豊かになるためには自発的な感謝の思いが結集されるところになされることです。感謝の思いがなされるために私たちが何をなすべきかを共に考えていくべきことが大切なことなのでありましょう。

今こそ東京教区は「神と神の国のために生きる共同体」となるために、私たちは霊的な一致と学びを求められていると考えます。東京教区はその最初の成り立ち以来、三つの宣教団体、アメリカの宣教団体、英国のCMSそしてSPGという三つの宣教団体の意見の相違をなかなか超えられなかった。それは戦前から引きずっている意識でもあり、一つになっていくということにおいては、本当に弱かったのではないでしょうか。また誰かに任せておけばどうにかなるのではないか、自分は適当に過ごしていればいいのではないかという、他人任せの意識があったようにも思います。勿論、東京教区のみならず、他の日本聖公会の10の教区とも一致し、キリストに招かれた者がみな神のみ言葉を学び、生き生きとしていくことは非常に大切なことですけれども、まず東京教区の一致と学習と言うことが大きな課題であると考えています。そ

のためにまず小職としては、教区の状況を顧みて、選択と集中と言うことを目指していきたいと考えております。それには各個教会の置かれた歴史や状況を踏まえての独自の使命を再確認し、実行していくことが求められるでしょう。しかしそれは一つの教会で完成できるものではなく、教会同士の協力と励ましが必要です。各教会の働きを実現させていくために、多すぎる委員会を縮少し、しかし一方では教区にとって重要な礼拝や教育研究を集中していくことが検討課題であると思います。そのために委員会制度の抜本的改革や、プロジェクトの見直しも行われなければならないでありましょう。今、教区会で抜本的な解決策を提示し、議案上程はしておりませんけれども、近い将来それらをすすめていきたいと思っております。そのために皆様のご意見などをお聞かせ願えれば幸いです。ただ、まずできることとして主教座聖堂の役割を強化していくことがあると考えます。具体的には聖職養成、教育部門や礼拝研究などの充実をはかっていきたいと思います。心を一つにしていくことにおいて主教座聖堂の活動は、非常にシンボル的なものになります。いつも司祭団の協力は祈りあっている、礼拝を共にし、学んでいるということをしっかりとしていくことは重要なことであると考えます。主教はそれを支える司祭団と共にあって働いていかなければ何もすることはできません。司祭団の一致が可視的に分かるようになっていくことは大切なことであるとこう考えます。礼拝と学びにおいて司祭団は一致している、それは教区全体に大きな影響を与えていくものと考えます。現状として今、一教会一牧師を派遣することが不可能な状況になってきています。教会グループの再編、チームミニストリーへの取り組みということも開始したいと思っています。チームミニストリーとは聖職間の協働牧会体制のことであります。私たち一人一人が神のみ言葉に砕かれつつ、各教会において自分のことだけではなく、隣人のことを常に意識していくと言う思いを醸成していって欲しいという風に思います。互いに協力し合う体制を作っていくことの重要性は、聖職のみならず、信徒も与えられた場所と時、能力を生かして協力して頂きたいと、この様に思います。そのためには、いま東京教区の中で多く任命されている信徒奉事者の重要性というものはいうまでもありません。実際の病床の訪問などを行うこと、礼拝の執行なども積極的に行っていくこと、そのために自己研鑽を積むこと、更に他の人々に奉仕する者であることの確認は重要なことであり、信仰の喜びにもつながってくることと確信しております。

☆震災で学んだもの

3・11の震災は私たちに大きな衝撃と課題を与えました。犠牲になった方々の、まだまだ続いている終わっていない苦悩に直面し、時には私たちは絶望を覚えることもあります。しかしその中で私た

ちは本当に希望の光をも見出しつつあります。私たちは今、様々なことが教えられています。5指標の中にもありますが、被造世界全体のいのちを大切にすることは早急に考えなければならない大きな課題であります。原発の問題は、自分たちの便利さのために誰かを犠牲にしていたことを気付かされました。またそれは基地の問題も同じことが言えると考えられます。いろいろな切り口から、同じ方向性が見えてくるような気がしてなりません。しかし現状は何もかもが、バラバラに有機的なつながりが無いようにも思えてなりません。多様性ということは大切ですけれども、あまりにもいろいろなことをしすぎてしまったのでないかと反省してみることも大切なことと思います。希望の光と言う点では、失われた者とイエスは共に歩まれているということが再確認できたことだという風に思います。これは東北教区の長谷川清純司祭のお話ですけれども、「自分たちが被災された人々の所に行って教えられたこと、それは被災された方々の中にすでにイエスがおられたということです」とお話されていたことが私の心に深く残っております。自分のことばかりで汲々とし、様々な思い煩いを恐れていてはいけないのだろう。私たちは自分ができることを探し出して何かをしていくこと、神の宣教の一員として働いていくことを通して、イエスに倣うものとし、神の宣教に具体的に派遣され、促され励まされていくことができるのであろうと私は思います。現在、中村淳司祭様はいま東北教区から帰ってこられて今教区会にもご出席されておりますけれども牧師の任を離れ、一緒に歩こうプロジェクトに専念していただいております。ご苦労を強いて、また特に4月に牧師に任命されたにも拘らず、送り出してくださっている東京聖マルチン教会の方々のご苦労を私たちは忘れてはいけないことだと思っています。中村司祭を独りぼっちにしないためにも、具体的な活動をしていただけることは他の教役者や教会に望むことであります。各教会におかれましては、3日でも一週間でも構いません。そのために司祭派遣に向けてのご協力をお願いしたいという風に思います。すでに秋田の教会に中川司祭は毎月行ってくださっておられます、また何人かの教役者は被災地域に行かれておられますそれは本当に嬉しい限りです。また各教会で震災募金を捧げて頂いていることは本当に感謝に堪えません。献金には痛みが伴います。なぜなら持っているあまり物を私たちは分かち合うわけではないからです。一緒に生きるということを実践するために、私たちは「一緒に歩こうプロジェクト」と共に、東京でも具体的な活動をしていくことが出来るのではないかと思います。たとえば11月3日にこの聖アンデレ教会を会場に、福島から東京に避難している方々のためにチャリティーデーが行われました。準備が急でありましたけれども、多くの方々が参加してく

ださいました。東京においても様々な困難に遭遇している人々がいる。私たちが気付かないでいる所に、私たちと共に生きて欲しいと願う人々がたくさんいるということを発見していくこと、その人々と寄り添って行く活動の重要さを私は知らされた思いがしています。震災関連の事につきましては、東京教区の震災対策本部長の後藤務さんから後ほど報告の時間を頂きたいという風に思っています。教役者会では主教座聖堂で月に一度聖餐式を行っておりますけれども、これは大変に重要なことであります。祈りの連帯を常に私たちは再確認されております。小職としては次年度も続けていきたいと考えています。第三日曜日の午後6時からですけれども、是非多くの方々の祈りを結集させていきたいと思います。

共に歩まれているイエスが居るということは、聖餐式によって養われ再確認できることであります。様々な危機的状況、財政の問題、信徒の減少高齢化、牧師が病気で倒れるなど。菅原裕治司祭は一度倒れ、幸い今日はこの教区会にも出て回復されつつありますけれども、退職された後もまた教会の奉仕活動を続けてくださっている河野裕道司祭は現在入院されております。などなど、たくさん私たちの前に問題点や不安材料が立ちふさがっています。一度にすべてそれらを解決する特効薬は無いかもしれません。それゆえに時には私たちは不安になることもあるでしょう、しかしライフスタイルの見直しをしていくこと、絶えず自分を変革させ刷新する覚悟を持ち、礼拝によって養われることを通して私たちは、私たちに与えられた課題を乗り越えていくことができるはずであります。各個教会が全てをなすことはできません。課題の達成などについて、全ての課題を一教会がすべて担えるはずもありません。東京教区は一つの共同体として、固有の働きを互いに認め合うことのできるような信頼関係をもっていきたいと願っています。そのためにも、派遣された牧師が複数で協力し合っていけるようになったら展開があるのではないでしょうか。各個教会のおかれた特質、歴史性、様々な事柄があります。まず現在のおかれている状況で各教会のなすべきことを知り、各個教会の宣教ビジョンの策定を行っていただければと思います。そして全体として東京教区が一つの共同体として大きな宣教の器へと成長していければと考えます。どんなに遠くに離れていても私たちは一つです。たとえば小笠原の教会のことを、私たちは大切にしていきたいという風に思います。世界自然遺産に登録された小笠原には、唯一キリスト教の教会として小笠原聖ジョージ教会があります。その宝物も大切にしていきたいと考えます。

最後に、この秋から塚田聖職候補生を英国に留学させました。それは礼拝と牧会学の研鑽のためです。留学させることは彼にとっても教区にとっても大きな決断を有することでありました。皆様の理解と励まし、そしてまた送り出す思いが必要とあったとは考えていますけれども、幸いにもケンブリッジ大学のリドリーホールのご理解によって急に事が運んでいきました。彼には宣教や牧会についての神学的なことをこれからも東京教区に還元してもらいたいと思っております。

分かりにくい点も多々あったと思いますけれども。これからの一年間、礼拝を中心として信徒も教役者も一致し、学んでいくことができるように、聖霊の導きをお祈りしていきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

《第117（定期）教区会》開会演説
2011年11月23日（水・休日）
聖アンデレホール
［編集・制作　広報委員会］